



セリグマン、キングマン、ホルブルック、ジョセフシティなどのアリゾナー帯は年をとっても元気なアメリカのオールド・ボーイたちがピカピカに手入れをされて現役で走っている姿を数多く見かける。肉厚なボディにテールフィンを生やしているものなど個性あふれる姿をとおり人びとがクルマに求めていたものが何だったのかがじんわり伝わる。



<http://www.route66magazine.com/>  
<http://www.arizonahighways.com/>



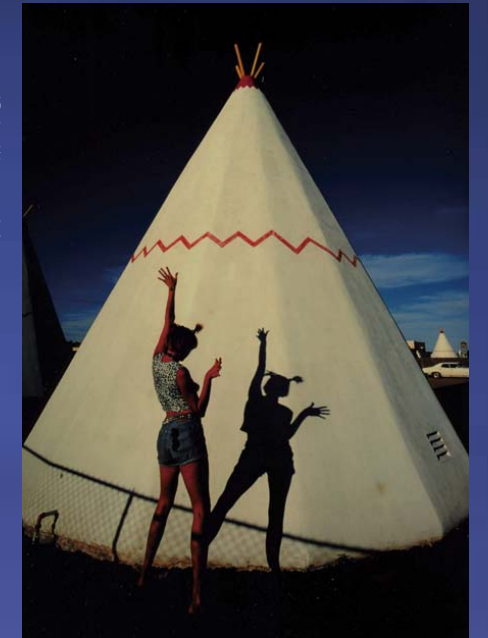
1冊丸ごとルート66に関する記事を取り上げる「Route 66 Magazine」は年4回の発行。「Arizona Highways」はアリゾナ、ニューメキシコ州のルート66に関する特集記事で定評がある月刊誌。専門誌も多数発行されており右の「Route 66 Across Arizona」by Hexagon Pressはそのひとつ。

Photo/John Running

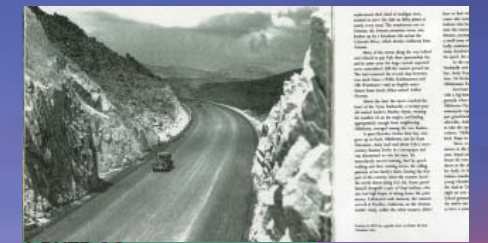
# 【ルート66号物語】 ROUTE 66

## グレートブランド物語 Great Brand Story

第38回:文と構成 / 河村喜代子



アリゾナ州にあるウィグワムモーテル。インディアンの伝統的住居ウィグワムはお椀を伏せたようなかたちだが、ここではティビーが並ぶ。沿道の名物的存在。  
<http://www.galerie-kokopelli.com/wigwam/>



「Route 66 The Mother Road」by Michael Wallis, St. Martin's Press, 1981はシカゴからサンタモニカまでをたどりながらルート66の成立をつかむのにもってこいの一冊。各地に残る歴史的ポイントの紹介もある。

**ルート66はアメリカが共有するブランドになった。こんなことができる道があるのはアメリカだけだ。**  
ルート66を行き来したり、この道によって生きてきた人たちがポップカルチャーを生み、それが国境を飛び越えて世界へと伝播した。

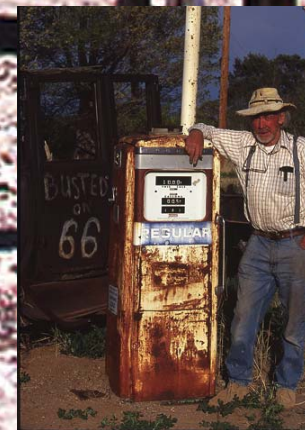
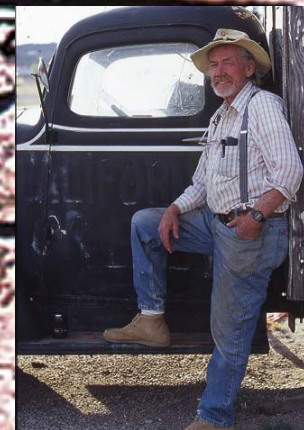
ルート66号線。この道はイリノイ、ミズーリ、カンザス、オクラホマ、テキサス、ニューメキシコ、アリゾナ、そしてカリフォルニアと8つの州を越え3つのタイムゾーンを抱えこみ中西部から西部へとアメリカを横断していた。全長2347マイル、約3755キロ。1925年にアメリカが繁栄の絶頂期にあったジャズエイズのたぐいで連邦助成幹線道路条例が施行され、各地で幹線道路のシステム化が始まった。その先頭を切ったルート66が1926年に誕生した。

当初、舗装されていた部分は全体の3分の1に相当する約800マイルに過ぎなかった。完全舗装されるまでには、11年の時間がかかった。そこからアメリカのメインストリートと呼ばれる時間を過すが、幹線道路としての役割は長くはつづかなかった。インターステート・ハイウェイ州間高速道路網に取って代わられ、1985年に廃線が決まって役目を終えるまでのわずか60年足らずのことだったのだ。

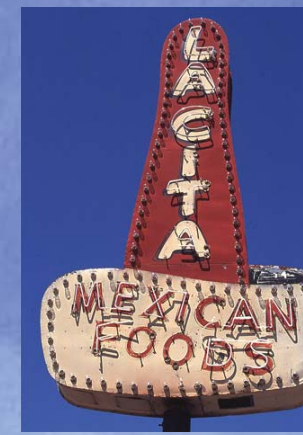
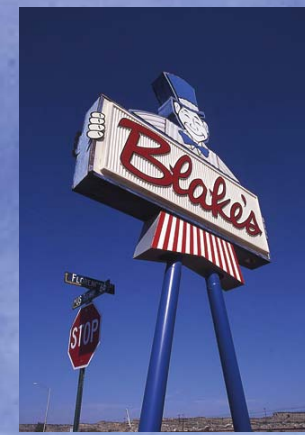
今では「歴史的な」や「伝説の」という冠がルート66の前にかならず付く。「軍で西に向かうなら」と明るく歌いだす「ルート66」の曲のようには、全行程をたどることは難しい。舗装の跡を探すことすら困難で、雑草の先に道筋が消えたところもある。けれど車窓を流れていったにちがいない「セントルイス、ジョプリン、ミズーリ、オクラホマシティ、アマリコ、ギャラップ、ニューメキシコ、ラッグスタップ、アリゾナ」といった地名は、夢をつないで西へ移動をつづけたアメリカの時代と固く結びついている。西

に向かうことで大きく動いてきたアメリカの歴史は、この道の上で再び繰り返された。1930年代の大恐慌のさなかにはT型フォードのエンジンのあえぎ声を聞き、第2次世界大戦が終ると入れ替わりに流線型のボンティアックやテールフィンを生やしたキャデラックが残響をとどろかせて光の都サンタモニカへと疾走した。クルマによって先導されたアメリカそのもののライフスタイルは、この道の上でもっとも強い輝きを放つ時代を招いた。フ

アストフォードのチェーン店、煌々とライトが灯るガソリンスタンド、モーテル、ダイナーなどポップなアメリカ文化が次つぎと生まれ拡散した。この道を通った人びとが、新たな希望と未知なものに挑戦する勇気を伝えた。夢を実現する代わりに支払われた対価も含めて、20世紀のアメリカを彩る文化の種の多くがこの道の上から各地へ飛び出していた。この意味からも、作家スタインベックがルート66をマザーロードと呼んだのはふさわしかったのだらう。



アリゾナ州ジョセフシティにあるジャックラビット看板は  
 トレーディングホストの看板だがルート66全体で一二を争う有名な看板である。  
 そのアリゾナと隣のニューメキシコ州をとおるルート66は  
 ガスステーションやコーヒーショップなど繁華の60年代を彷彿とさせるポイントが多い。



トニー・ラマの巨大カウボーイブーツの看板は、テキサスのアマリロにあったもの。  
隣ページにあるMr.D'sのハンバーガー屋とこのページの左端にあるセリグマンへの歓迎看板は  
アリゾナにあるもの。それ以外の写真のロケーションはすべてニューメキシコである。

ポップでカラフルな巨大看板やモーテルのサインが立っている場所を  
通り過ぎてしまうと延々と無人の砂漠地帯がつづくといったことが珍しくない。  
そこに行けば人がいると分かるモノがあるとほっとする。  
アメリカは今でも一歩、街を外れたら広大な自然がすぐそばに広がっている国なのだ。

